

## 【自由論題セッション】

### 地域の歴史文化及び経済に接近する PBL の意義 : わっかないコーヒーフェスティバルからの一考察<sup>1)</sup>

黒木宏一(九州産業大学)

#### 1. 背景と目的

本稿は、2015 年 12 月に稚内中央商店街振興組合と稚内北星学園大学が主催したプラコンで優秀賞を受賞し、16 年2月に WCF2016 を実施した学生団体「わっかないコーヒーフェスティバル実行委員会(WCF 実行委)」の 2015 年度、2016 年度及び 2017 年度(見直しを含む)<sup>2)</sup> の活動について報告するとともに、まちづくりや大学における正課および正課外活動の視点で WCF 実行委の活動の意義を整理する。宗谷地域の歴史を再認識するとともにその歴史を活用し、企業団体との関係性の広がりや深化により、教育活動(PBL: Project-Based Learning)としての定着の可能性が見いだされたことについて言及する。特に、経済学分野の教育における PBL の意義や課題について考察することを目的とする。

#### 2. 事例の概要

**活動第 1 期:** WCF 実行委は、プラコン優秀賞受賞とともに WCF2016 を実施(主管)するために発足した。WCF2016 は、稚内中央商店街内の特設ブース(2016 年2月 13 日)と参加店舗(20 店舗)で2月 13 日~20 日(8日間)に使用できるコーヒー券を発売し、多くの方々に稚内に歴史的な背景を持つコーヒーを通じてまちなかでのひと時を楽しんでいただくという企画であった。

WCF2016 の成果は概ね以下の通りである。①商店街の賑わいの創出: 特設ブースには 350 名を超えるお客様が来場した。②チケットの完売: 300 枚の目標に対して 500 枚のチケットが完売し、流通した。③参加店舗の売り上げへの貢献: 新規顧客の来店、来店に伴うフードの注文があり、「売り上げに貢献した」(参加店舗アンケートの 93.75%, 有効回答数 n=16)との回答を得た。④来場者の高い支持: 来場者から「このようなイベントがあれば、次回も参加したい」(参加者アンケートの 98.00%, n=50)との回答を得た。⑤メディアの理解: 新聞等でも数多く(15 記事)取り上げられた。

**活動第 2 期:** WCF2017 は、まちラボに特設ブース(2017 年2月 11 日)を開設し、市街地内の喫茶店等 30 店舗の参加(対前年 5 割増し)を得て、2月 4 日~19 日(16日間)に使用できるコーヒー券を販売、WCF2017 を開催した。

WCF2017 の成果は概ね以下の通りである。①商店街の賑わいの創出: 2月 11 日のまちラボ特設ブース来場者は、550 名を超えた。②チケットの追加販売: 当初予定 500 枚に対して上限に設定していた 700 枚も完売し、増刷を行い、結果として 731 枚が販売され、流通した。③参加店舗の売り上げへの貢献: 新規顧客の来店、来店に伴うフードの注文があったことが報告され「売り上げに貢献した」とのは 95.45% (n=22) に及んだ。④来場者の高い

支持：「このようなイベントがあれば、次回も参加したい」との回答が 100.00% (n=68) と来場者の高い支持を得た。⑤ 口コミによる来場者の増加：WCF2016 の来場者アンケートでは「口コミ」でイベントを知ったとの回答が 25.50% (n=51, 複数回答) だったが、WCF2017 では 46.00% (n=66, 複数回答) であった。⑥ メディアの理解：新聞等でも数多く (10 記事) 取り上げられた。⑦ 商店街の買い物ポイント「タコカポイント」がたまるスタンプラリーを稚内中央商店街の 16 店舗の協力により実施した。

### 3. 考察

**地域の活動主体の関係性の広がり**を軸に：敷田は、効果的なまちづくりということについて「活動 (事業) が対象とする範囲の広がり

に気を付けなければ、できもしないことを手掛けてしまい失敗する」(敷田 2013、23 頁) と述べている。WCF2016 と WCF2017 の参加店舗数は 20 店舗から 30 店舗に、チケット発券枚数は 500 枚から 735 枚に、協賛口数は 38 口から 45 口にそれぞれ増加した。WCF 実行委は「できること」を着実に実施するとともに、経験の蓄積を背景としてその幅を緩やかに広げている。その過程で他の主体との関係を時間をかけて醸成しており、イベントの主催を中心として、「まちづくり」へのかかわりを深めていくことが期待される。

**教育活動として**：近年、社会人基礎力の涵養という社会からの要請に応じるべく、アクティブ・ラーニングの導入が全国の大学においてみられる。ここでは、いわゆる能動的な学習をどのようにデザインすべきか、という点について考える。敷田 (2005) は、工学における創成教育の学習モデルとして、「サーキットモデル」の適用を示した。サーキットモデルのプロセスに当てはめて、WCF 実行委の教育活動としての意義を確認する。

### 4. おわりに

考察の結果として、以下の4点を指摘する。① 地域の様々な活動主体とのゆるやかな関係性の広がり

が認められる。イベントの主催を中心として様々な「まちづくり」へのかかわりを深めることが期待できる。② コーヒーの歴史やまちの現状の改善、コーヒー文化の再認識のための取り組みを担う組織となりうる。③ 財務を含めた組織経営の基礎が構築されつつある。④ WCF 実行委の活動は、アクティブ・ラーニングの「場」としての意義を有している。

注1) 本報告論文は、黒木ほか (2018) を、特に経済学分野の教育における PBL の意義について考察するため内容を改変し、加筆・修正を加えたものである。

注2) 紙面の都合上、本要旨では 2017 年度の活動についての記述を省略する。

#### <参考文献>

1. 黒木宏一・吉岡大輔ほか (2018 発行予定) 「大学教育にゆるやかに関連する地域催事の企画及びその継続的実践の意義：稚内北星学園大学 WCF を事例とした考察」『稚内北星学園大学紀要』第 18 号
2. 敷田麻実 (2005) 「サーキットモデルによる創成教育の学習モデル」『工学教育』第 53 巻第 1 号、35-40 頁
3. 敷田麻実 (2013) 「観光まちづくり総論」地域観光マネジメント人材育成セミナー実行委員会『平成 25 年度北の観光リーダー養成セミナー講義テキスト』第 1 章、全 52 頁